

ああ、相談業務

～茜さんの話～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

はじめに

新シリーズを始めるにあたり、私の相談業務の経歴をお伝えしておきたい。スタートは家庭児童相談員であり、養護・養育相談、不登校、非行、障害・発達相談に従事していた。これらの相談は、児童相談所とほぼ同じ内容で、児童相談所と連携が欠かせない内容も多かった。その後、スクールカウンセラーや行政の相談業務を行う傍ら、私設事務所を開設し、子どもに関わるだけでなく、より幅広い相談にのるようになった。こうした中で、私が実際に行ってきた相談対応を元に、ケースへの対応を何回かに分けて伝えていこうと思う。但し個人情報保護の問題もあるので、全て架空のケースであり、実在の人物とは一切関係ないということをお断りしておく。

以下のケースは私が相談業務を始めて間もないころに扱った。

茜さん家族

茜さんは身体障がい者手帳を持つお母さんである。耳が不自由で、恐らく途中で聴力を失った

と思われ、両耳補聴器を使ってはいるが、発音や聞き取りに違和感はなかった。お子さんを4人人生み、育てている。この方と関わることになったのは、お子さんのうちの一人が不登校になったことからである。

茜さんから、長女、美穂ちゃんの不登校の相談が始まったのは、夏休み明けてしばらくたったころである。相談にいらした時は、次男をおんぶ紐でおぶって、疲れた表情だった。美穂ちゃんは夏休み前も時々お腹が痛い、頭が痛いと訴えて、学校を休むことがあったが、まだそれほどでもなく、あまり心配していなかったのだが、夏休み明けから2週間、丸々行けていないというのである。

当時は不登校が中学校を中心に増えている時期で、まだ適応指導教室などは出来ていなかった。

家族について学び始めた私は面談するときに、必ず最初に家族のことをお尋ねすることにしていった。

茜さんは、34歳。目がくりっとして、ショートヘアーの小柄なお母さんで、専業主婦。お仕事は高卒後事務をしたことがあるということだった。手が器用で、裁縫や手芸なども得意だそうで、おんぶ紐も手作りだった。ご両親は健在だが遠方

に住んでいて、お産の時はその都度ご実家に1か月ほど帰ったが、子育てを手伝ってもらうことは難しく、兄弟も兄がいるが、結婚しておらず、手伝いにはならないとのことだった。つまり4人の子育てを一人で頑張るといってお母さんである。

ご主人の義男さんは36歳で公務員。この方も小柄な、どちらかというとなで金で大人しい方である。義男さんのご両親は他界して、兄弟はいるものの疎遠とのことだった。

美穂ちゃんは、小学5年生。とても家族思いの優しい子で、勉強は普通で。運動が得意とのこと。先生との関係も悪くなく、仲の良い友達もいるということであった。

長男の健太君は小学3年生。元気のよい、活発なお子さんである。勉強はあまり得意ではなかったがスポーツは得意で、かけっことはいつも一番。運動会ではリレーの選手ということだった。

次女的美紀ちゃんは、幼稚園年中の5歳。発達面も健診等で問題なく、楽しく園に通っていた。

次男の豪君は生後4か月の赤ちゃん。発達面での問題を指摘されたことはなく、順調に母乳で育てていた。

相談が始まる

美穂ちゃんの不登校について、一通りお話を聞いた。5年生と言うのは友達関係が難しくなる時期で、ご多聞に漏れず、仲良しの友達から省かれたり、無視されたりと言うことがあって、少しずつ行きづらくなったと本人は話しているようである。家でどのように関わっているのかと聞いてみると、母親は「あまり無理に行かせようとはしていない。」という。母親自身、耳が不自由なことで、小さいころから沢山いじめにあっていて、学校という場に対しあまり良い印象を持っていないこともあるようだった。学校とは連絡をとっているか、担任からはどのような話があるか、学校と話をしてみてもよいか等、ある程度お決まりの話を作り取りしてから、母親の表情の冴えなさに、

何か気になることが別にあるのではと感じて、話を更にきいた。

ポツポツと話し始めたのは、母親自身がどれほど嫌な思いをしてきたかということ。周りの人が、母親に対して陰口を言ったり、馬鹿にしたり、ロボットと言ったりするなどである。聴覚障害を持つ方は、周囲の人に対し被害者意識を持つことがあると聞いたことがあったが、半分は事実で半分は過剰反応なのかなと思いつつ話を受け止め、辛かったであろう日々を思いを馳せ、と同時に、そんな中、頑張って高校を出て、仕事もし、そして結婚して4人の子育てを頑張っていることを認め、褒めた。母親と良い関係性を作れなければ、次の面談を持てない。面談の継続が美穂ちゃんや母親支援の第一歩である。母親が自身のことを吐露してくれるのは良い兆候で、何とか、関係性を作ることが出来た。母親が安定することで子どもが安定することも良くある。もしかしたら、美穂ちゃんも母親の安定で変わるかもしれない。そんなことを思っていた。

転機

その後数回の面談を続けていた。子どもの不登校は、簡単に解決する場合もあるが、時間が経ってしまうと中々進まなくなる。母親が焦って登校させようとするとう悪化することも多い。母親は学校に無理に行かせようとはしないので、美穂ちゃんのはのびのびと家で手伝いなどをしていると聞いていた。小さい赤ちゃんの面倒もとても良く見ているという。学校に行くことが全てではない。家事や育児を手伝うことで学ぶことも多い。美穂ちゃんの様子を聞いていて、一度会ってみたいから家庭訪問をしても良いかと尋ねると、母親からは構わないとのこと、その後まもなく家庭訪問をさせてもらった。家は、平屋の公営住宅で部屋数は三部屋、家の中は子どもが多い割には物が少なく、片付いていた。初めてお邪魔したこともあり、最初から美穂ちゃんと話せるとは思って

いなかったが、案の定、私の来訪と同時に美穂ちゃんは家から飛び出していった。学校に行っていないことが、きっと罪悪感に繋がり、抵抗感があったのだろう。そんな時は無理に話そうとはしないので、元々書いてきていたお手紙を母親に渡して、帰ろうとすると、母親が「実は・・・」と話し始めた。最初に家族の話聞いたときには出てこなかったが、父親がおかしいというのである。

（以下「」は筆者、『』は茜さん）

「え？どんな風におかしいの？」

『怒りっぽくて、怒鳴り散らすし、美穂にも下の子たちにも、何もしていないのに怒鳴ったりする。』

「それは最近始まったの？」

『今年になってから少しずつ増えている。体調も悪いのかもしれないが。』

「体調が悪いって、どんなところが？」

『何か身体が思うように動かないと言ってイライラしている。』

「病院は行ったのかな？」

『まだだと思う。身体が悪かったら公務員は続けられないから、診断されても困るのかも。』

「でも病院に行くよう説得しましょう。どこがどう悪いのかわからないと、お母さんも困るし、子どもたちも困るでしょう？」

『それはそうなんだけど……。言ってもきかないから……。』

「職場で健康診断があると思うけど、そこで引っかかったりしていないの？」

『昨年の健診では引っかからなかったみたい。』

「まだ若いから何かあっても進行が速いということもあるから、一度大きい病院で見てもらうとかした方が良くないか。」

『そうですね。一度言ってみます。』

というやり取りの後、父親の件はしばらく保留となって、美穂ちゃんのこと集中した。美穂ちゃんは学校の先生との関係も悪くなかったため、時折家庭訪問を入れてもらいながら、

少しずつ別室登校をすることもあったが、大きな変化があるということも無く時間が過ぎて行った。父親から怒鳴られることも不登校に影響しているのかと心配していた。

は？

そんなある日、突然母親から電話が来た。『もう何もかも嫌になった。子どもたちと死にます。』と言ってガチャンと電話が切れた。

「え・・・？」私は正直、何を言っているのか一瞬解らなかった。ただ、子どもたちを道ずれに心中すると言っているのだとすぐに気付き、その時の上司に報告。直ぐに訪問したいと伝えた。上司も心配して一緒に来てくれるとの事、二人で直ぐに駆けつけた。

玄関の戸は固く閉まったままで、ベルを鳴らしても返事がない。「茜さん、河岸です。開けてくれませんか？」と声を何度もかけていたら、やっと来た返事は『話すことはありません。死にます。もういいです。』と取り付く島もない。「そんなこと言わずに、先ず話をしましょう。今まで頑張ってきたじゃないですか、死んじやだめです。」後何を言ったか覚えていないが、兎に角「死なないで、話をしよう、ここを開けて」を繰り返していたと思う。

30分くらい粘ったと思う。その甲斐があったのか、母親が玄関を開けてくれた。まだ表情は暗く、余り人を寄せ付けたくないという雰囲気ムンムンだったが、へこたれずに玄関に入り込み、話し込んだ。一体何があったのかを聞かせて欲しいと懇願したところ、茜さんが重い口を開いた。

『父親の病気は小脳変性症だった。だんだん身体が動かなくなるそう。病名がわかったのは良いが、治らない病気と言うこともあってますます父親が荒れだした。赤ちゃんを窓から投げたり、物も投げようとした。』

「え？赤ちゃんを投げた？大丈夫だった

の？それいつの話？」

『ちょっと前。夏の終わり位。赤ちゃんは美穂がたまたま外にいてキャッチしてくれた。こんな状況では生きていけない。父親が働けなければ、生活も成り立たない。死んだ方がいい。』
と言うのである。

夏の終わり？随分前の話ではないか。もしかして、病気のことはずっと前に分かっていたのか？今まで伝えてくれなかっただけか？死にたいというのは何か別の意図があったのか？など、頭の中を駆け巡った。それに、心中しなくても、離婚して働くとか、子どもがまだ小さいから生活保護を申請するとか、方法はいくらでもあるだろうと。

真実なのかどうかもわからなかったが、取りあえず、今後のことを一緒に考えながら、子どもが危ないということなら児童相談所に入ってもらって一時保護という方法もある、或いは父親の病状を確認して入院加療という方法もあるのではないかと、職場の上司と相談することも良いのでは、などを上司と一緒に話し、母親になすすべがまだあることを認識してもらった。そして、何があっても心中はいけない、お手伝いできることはするからと説得し、何とか母親も落ち着きを取り戻してもらった。

結 末

その後、結果的に父親は入院、生命保険が満額出ることなどがわかり、母親は落ち着いて行った。元々父親のこうした行動が、美穂ちゃんの不登校にもつながっていたようである。早くにこの話を聞いていたら、もっと早く対処できたが、人は中々最初から本音を出してはくれないものだ。家庭が落ち着いてきたことで、美穂ちゃんも少しずつ学校に戻って行った。

母親は、保険金があるとはいえ、まだ小さい子がいるので、今後のために保険金は貯金するとし、お金を稼ぐことを考えた。元来の器用さ

を生かして小物を作り、雑貨屋で販売してもらうなど、積極的に動き始めた。

まとめ

家族の問題では、家族の中で問題となる人がその症状を出さず、当の本人以外の方が症状を出すことがある。特に子どもは、症状を出しやすい。不登校や非行の子どもの多くが家族の問題を抱えている。家族には借金や夫婦関係、嫁姑問題など様々な問題がある。子どもには関係のない問題であっても、敏感な子どもたちは、家族内の不穏な空気に気づいたり、実際に狭い家の中で繰り広げられる諍いに心を痛めたりしている。

茜さん家族の問題に関わって、最初、母親のいじめ体験などから来る不安定さが、美穂ちゃんに影響しているのではと仮説を立てたりしたが、家族の問題と言うのは、当事者の語る話が全てではないと学んだ。最初の面談で、家族のことをあれこれ尋ねるようにして居たが、もっとしっかり聴くべきであった。特に父親の状況については、十分に聴き取れていなかったと思う。そして、この家族が抱えている本来の問題を探るために、家族の語る物語、語っている人の表情、意図、物語の陰に隠れている別の物語があるのかなのか、聴きとることの難しさを改めて感じた。

子どもや誰かの症状にばかり気を取られていても、真の問題解決には至らない。家族はその歴史の中で様々な絡み方をしてきている。その絡んだ糸をどこから手を付けてほどいて行くか、その手掛かりを正しく見つけられれば、スルスルともつれた糸がほどけていく。しかし、手掛かりを間違えると、もっともつれてしまい、二度とほどけなくなってしまうことさえある。他人の家族に関わるということは、その責任をシッカリと胸に留めておく必要がある。そんなことを学んだ事例であった。